

「日記物語」と随筆

大橋清秀

わたくしは平安時代の文学を次のように考えている。
真名による文学

(韻文) 漢詩

(散文) 漢文

かなによる文学

(韻文) 和歌

(散文) 和歌

(散文) 物語

歌物語

作り物語

日記物語

歴史物語

説話物語

随筆

歌論

そして随筆は、従来日記文学とともに「日記・随筆文学」として、

「日記物語」と随筆

日本文学史において取扱われることも多かつたようである。このこととわたくしは抵抗を感ずるというのではない。わたくしは平安時代におけるかな文の文学の主流は「物語」であると考えて居り、そして「日記物語」は物語の一ヴァリエーションであると考えているのである。

平安時代における随筆は、清少納言のものした枕冊子だけしか現存していないのであるが、事実清少納言枕冊子がかな文による随筆の嚆矢であると考えられる。そしてこの随筆が「日記物語」の一ヴァリエーションではないかという考えを、わたくしはなかなか棄て切れずにいるのである。

一一

枕冊子三〇一段 田中重太郎博士校註
本古典金書本による。 日をみてみると、

この冊子、目に見え、心に思ふことを、人やは見むとすと思ひて、つれづれなる里居のほどに書き集めたるを、あいなう、人のために便なきいひ過ぐしもしつべきところどころもあれば、ようかくし置きたりと思ひしを、心よりほかにこそ漏り出でにけれ。

(中略)

おほかた、これは世の中にかしきこと、人のめでたしなど思ふべき、なほ選り出でて、歌なども、木・草・鳥・虫をもいひ出だしたらばこそ「思ふほどよりはわろし。心見えなり」とそしられめ、ただ心一つにおのづから思ふことをたはぶれに書きつけたれば、ものに立ちまじり、人なみなみなるべき耳をも聞くべきものかと思ひしに、「はづかしき」なんどもぞ見る人はしたまふなれば、いとあやしうぞあるや。げに、そもことわり、人のにくむをよしといひ、ほむるをもあしといふ人は、心のほどこそおしはからるれ。ただ、人に見えけむぞねたき。

とあるのである。これはいわゆる跋文といわれている部分であるが、この文章を吟味することによつて、隨筆の本質、及び發生の事情を明らかにすることが出来るのではないかと考えるところに、日記物語と比較することによつて、兩者の特質を明らかにすることが出来るべしと考へる。

枕冊子によれば、「目に見え、心に思ふことを、」つれづれなる里居のほどに書き集め」たものであるという。これによつて枕冊子が「つれづれ」の所産であることが明らかである。日記物語の多くも「つれづれ」の所産であることを思へば、兩者が全く異質のものでないことは明らかであろう。しかし、「目に見え、心に思ふことを、」書き集めたものであるというのに注意したいのである。これは目に映り、心に感じたことをそのまま書き集めたものであると考へられる。

そこで宇津保物語富田和一郎氏校註 本古典金書本による。日にみえてゐる男性のものしたかな文の日記についての記事をみてみると、「ありつることを、物

語のやうに書きしるしつゝ、その折の歌どもをつけたり。おもしろきところどころも、悲しきところどころもあり。」(蔵開 中)、「わがうまれける日より、亡くなり給ふまで、思しけるやう、ありけることどもを、しるしおき給へる日記は、肝絶えて悲しきことかす知らず、」(楼の上 下)とあるのである。これらによつて隨筆と日記物語との差異が明らかではないであろうか。

すなわち、枕冊子の筆者清少納言の関心は外に向つてゐる。そして目に映るものすべてに好奇心を持つてゐる。そして感じたことをすぐにそのまま書かずにはいられないようにも見える。

そこで日記物語が心理的であるのに対して、隨筆は感覺的であるということが出来るのではあるまいか。また、日記物語は筆者の目が内面に向けられてゐるのに対して、隨筆は筆者の目が外面に向けられてゐると考へてもよいのではなからうか。わたくしはここに隨筆の本質を見出すのである。

次に、「あいなう、人のために便づかないひ過ぐしもしつべきところどころもあれば、」と清少納言はいつてゐる。宇津保物語をみてみると、「おもしろきところどころも、悲しきところどころもあり。」(蔵開 中)とある。これによつても隨筆と日記物語の内容の差異が明らかではあるまいか。田中重太郎先生はこの部分をもつて、枕冊子に日記回想的部分が当初から存在した根拠とされているようであるが、わたくしはこの部分をもつて、隨筆が日記物語のヴァリエーションであるとする一つのよりどころと考へてゐるのである。すなわち紫式部日記のいわゆる消息文といわれている部分との近似性によるのである。

さて、清少納言はつづいて、「おほかた、これは世の中にかしきこと、人のめでたしなど思ふべき、なほ選り出でて、歌などをも、木・草・鳥・虫をもいひ出だしたらばこそ「思ふほどよりはわろし。心見えなり」とそしられぬ、ただ心一つにおのづから思ふことをたはぶれに書きつけたれば、」と書いています。ここにおいても隨筆の本質は明らかである。「ただ心一つにおのづから思ふことをたはぶれに書きつけたれば、」とある。そして「たはぶれに書きつけたれば、」とあることに注意したのである。これは清少納言の謙辞でもあろう。しかし、かげろふの日記喜多義勇氏校註 日本に、「人にもあらぬ身の上まで書き日記して、珍らしきさまにもありなむ、天下の人の品たかきやと問はむためしにもせよかしと覚ゆるも」(上巻)とあるのと比較してみると両者の執筆態度がおのづから明らかになつてくるであらう。隨筆は、「ただ心一つにおのづから思ふことをたはぶれに書きつけ」たものであり、清少納言は「ものに立ちまじり、人なみなみなるべき耳をも聞くべきものかはと思」つていたのであつた。

次に、枕冊子に和歌の少いことに注意したのである。

(藤良房) 年ふれば齢は老いぬしかはあれど花をし見ればもの思ひもなし(二二段)

(未詳) 潮の満ついつも浦のいつもいつも君をば深く思ふはやわが(二二段)

清 もとめてもかかる蓮の露をおきてうき世にまたはかへるものは(三二段)

清 かづきするあまのすみかをそことだにゆめいふなとやめを食

「日記物語」と隨筆

はせけむ(八〇段)

清 くづれる妹背の山のなかなればさらによしのの河とだに見じ(八〇段)

清 ここにのみめづらしと見る雪の山とどこに降りけるかな(八三段)

常陸介 うらやまし足もひかれずわたつ海のいかなる人にもたまふらむ(八三段)

齋院 山とよむ斧の響をたづぬればいはひの杖の音にぞありける(八三段)

実方 あしひきの山井の水はこほれるをいかなるひものとするなるらむ(八六段)

清 うは氷あわにむすべるひもなればかざす日かけにゆるぶばかりを(八六段)

宮 下蔵こそ恋しかりけれ(九五段)

清 ほととぎすたづねて聞きし声よりも(九五段)

宮 元輔が後といはるる君しもや今宵の歌にはづれてはをる(九五段)

清 その人の後といはれぬ身なりせば今宵の歌をまづぞよままし(九五段)

公任 すこし春あるここちこそすれ(一〇二段)

清 空寒み花にまがへて散る雪に(一〇二段)

清 つめどなほ耳無草こそあはれなれあまたしあればきくもありけり(一二六段)

じ(一三一段)

頭弁 逢坂は人越えやすき閑なれば鳥鳴かぬにもあけて待つとか

(一三一一段)

(一条) これをだにかたみと思ふに都には葉がへやしる椎柴の

袖(一三三一段)

兵衛の藏人(藤輔相) わたつ海のおきにこがるるもの見ればあ

まの釣りしてかへるなりけり(一七七一段)

宮 いかにしていかに知らまじいつはりをそらにただすの神なか

りせば(一七九一段)

清 うすさこさそれにもよらぬはなゆゑにうき身のほどを見るぞ

わびしき(一七九一段)

宮 みな人の花や蝶やといそぐ日もわが心をば君ぞ知りける

(二二五一段)

宮 あかねさす日に向かひても思ひ出でよ都は晴れぬながめすら

むと(二二六一段)

宮 山近き入相いりあひの鐘の声ごとに恋ふる心の数は知るらむ

(二二七一段)

(中将) ななただにまがれる玉の緒を貫きてありとほしとは知らず

やあるらむ(二二九一段)

清 かけまくもかしこきかみのしるしには鶴の齢となりぬべきか

な(二六一一段)

清 さかしらに柳の眉のひろこりて春のおもてを伏する宿かな

(二八四一段)

宮 いかにして過ぎにしかたをすくしけむ暮らしわづらふ昨日今

日かな(二八四一段)

清 雲の上も暮らしかねける春の日をとこがらともながめつる

かな(二八四一段)

道命 わたつ海に親おし入れてこの主の盆ひする見るぞあはれなり

ける(二八九一段)

道綱母 薪くすることは昨日に尽きにしをいざ斧の柄へはここに朽た

さむ(二九〇一段)

清 みまくさをもやすばかりの春の日に夜殿よどのさへなど残らざるら

む(二九六一段)

清 誓へ君遠江のかみかけてむげに浜名の橋見ざりきや

(二九八一段)

(某) 逢坂は胸のみつねにはしり井の見つくる人やあらむと思

へば(二九九一段)

清 思ひだにかからぬ山のさせも草たれか伊吹の里は告げしぞ

(三〇〇一段)

連歌二首を含めて全部で三十五首。枕冊子三百一段として、その

約一パーセント強の数の歌があるにすぎない。そこで宇津保物語に

みえている日記についての記事の中に、「その折の歌どもをつけた

り。」(藏開 中)、「折折に歌あり。」(藏開 中)とあることが想起

されるのである。そして土左日記、かげろふの日記などの日記物語

と比較してみると、枕冊子に収められている和歌の数ははるかに少

いことが明らかであると思う。

ここにおいて随筆は筆者の身の上や思いを述べるのが中心ではな

くて、筆者自身が興味を持ったことを「書きつけ」たものと考えら

れるのである。和歌は主情的なものである。外界を客観的に見、感
じたことをそのまま率直に書きしるしてゆく随筆に、和歌の少いの
は当然のこととも考えられるのである。

三

清少納言は、はたして随筆という文学形態を創始しようという意
欲を、執筆の最初から持っていたのであろうか。わたくしはこのこ
とについては否定的な考えを持っている。

清少納言が生きていたころは、物語の全盛時代であつた。すくな
くとも女性は和歌と物語に一番多く親しんでいたと考えられる。し
かし、かげろふの日記の出現以後、女性が主体的に自己の身の上や
生活感情を書きしるすこともすで行われていたのである。そして
わたくしのいう日記物語が女性の手によつてものさかっている生活環
境の中にあつて、清少納言が「目に見え、心に思ふことを」「つれづ
れなる里居のほどに書き集め」「ただ心一つにおのづから思ふこと
をたはぶれに書きつけ」たものが、「ものに立ちまじり、人なみな
みなるべき耳をも聞くべきものかは」と筆者である清少納言自身も
思つていたところが、『はづかしき』なんどもぞ見る人はしたまふ
なれば、「清少納言も「いとあやしうぞあるや。」といつていたので
はないであらうか。すなわち、「人やは見むとすると思ひて、「書
き集め」た結果が、かな文による随筆の嚆矢になつていたのである。
しかも、この枕冊子が書かれた時に、この作品を随筆という文学形
態に属する作品として、読まれ取扱われていたのではなかつたので
ある。

すでに先学が述べていられるように、清少納言は、「雑纂」（李
商隱）、「十列」などの漢籍その他から影響を受けたことは考えられ
るが、たくまずし枕冊子のような作品が産み出されたのは、清少
納言という人の資質によるところが大きいと考えるのである。

かげろふの日記をもつた藤原道綱の母と、清少納言との個性の
差異が、一は日記物語を完成し、一は日記物語のヴァリエーション
と考えられる随筆を作らしめたのではなからうか。

わたくしは平安時代における唯一のかな文による随筆である枕冊
子を、日記物語の一部と認めて、日本文学史において、

日記物語

随筆

というように位置づけるべきかとも考えていたが、枕冊子のかな文
による随筆としての獨創性を没却することが出来ず、随筆文学とし
ては未だしと思われる節はないが、枕冊子にかな文による
随筆の発生を認め、最初に記したように日本文学史において、「物
語」という文学形態に対して、「随筆」という文学形態を並立する
位置に置くべきだと考えるに至つたのである。

以上によつてかな文による随筆の嚆矢である枕冊子のうまれ出て
来たすじみちと、随筆の本質を明らかにすることが出来たかと考え
るとともに、日記物語と随筆の特質を明らかにすることが出来たか
と考えるのである。